日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園１-11-15　日本教育会岩手県支部　TEL 019-623-8100　● 代表　川村　祥平



これからの学校教育が果たすべき役割

岩手県小学校長会　会長　金野　治
（盛岡市立仁王小学校長）

ドキュメンタリー監督である山崎エマさんの作品「小学校～それは小さな社会～」が昨年公開され、高い関心をもって鑑賞しました。作品は、東京の公立小学校に一年間カメラが入り、授業や行事、掃除、給食等、日常の学校生活を撮影したもので、先生の苦労の姿もそのまま紹介しておりました。

教室の清掃や給食の配膳、行事の準備等どれも日本の小学校では児童が主体となり役割を決め協働して進めます。一方、海外では掃除を専門の方に任せ、行事の準備は保護者や教師が行う場合が多いと聞きます。児童が学校の運営の一部を担い、組織の一員として機能するという日本の学校生活は国際的にみて特別のことのようです。

大リーグで活躍している大谷翔平選手のグランドのゴミ拾いや山本由伸選手のベンチ周辺のごみを片付ける姿等が反響を呼んでいます。スター選手が自発的にごみ拾いや片付けをする行為は米国では異例のようですが、日本では特別珍しいことではありません。幼い時期から自然に培われた習慣が国際舞台でそのまま表れた形です。

これらのことは、日本社会に浸透した組織での規範意識の強さを際立たせます。公共性や秩序を重んじ、社会や組織の一員としての役割を誠実に果たす姿勢は、日本社会の信頼を高めてきました。

ただ、この規範意識等が経済や産業の「革新力」に対する課題を浮き彫りにしている面もあるとのことです。調和の重視は、他と違った意見や大胆で飛躍的な発想を抑え、失敗を許さない風土は、新たな挑戦を躊躇させます。既存の枠から外れる行為が消極的になれば、個々の創造性は高まりません。日本で革新的なアイディアや技術を取り入れ新たな価値を生み出すことが難しいとされる背景には、こうした規範意識や調和の重視、失敗を許さない風土が深く影響しているのかもしれません。革新のはじまりは、これまでにない見方・考え方での対立や当たり前への問いかけにあります。しかし、日本の教育や組織文化は秩序や調和を優先し、他と異なることや普通と違うことを受け入れることに慎重な傾向があります。

こうした課題を改善するには社会全体での価値観の転換が不可欠となり、まず学校教育においてこれまで以上に多様性を尊重する姿勢を初期段階から育み、学校を含め社会全体で異論を排除しない文化を定着させる必要があります。

これまで日本社会の信頼を高めてきた公共性や秩序等は引き続き大事にするとともに、他との異なりや普通と違うことを受け入れる風土を築き、新たな価値を生み出す創造性の向上を、我々はより意識する必要があると考えます。

将来の社会を担う人材を育成するため、特にも「革新力」をより高めるために、「規律」と「個の創造性」という二つの価値をいかに質の高い教育を通じて両立させるかが、これからの学校教育が果たすべき役割であると考えます。

令和８年度支部定期総会

今年度事業計画・予算案等承認

講演は　赤坂真奈美 氏

令和８年度日本教育会岩手県支部定期総会は、５月30日（土）午後１時から、ご来賓、理事、監事、代議員、支部役員の53名が出席して、盛岡市のサンセール盛岡で開催されました。

開会行事で、支部長から「岩手県支部は現在会員数３４００名を超す全国有数の支部であります。これは会員の皆様、関係機関の理解と支援の賜物であり、感謝申し上げるとともに、今後も力添えをお願いします。文部科学省は、令和３年１月の『教育課程審議会答申』で、『令和の日本型学校教育』の姿を示しました。その中ですべての子どもたちの可能性を引き出すための『個別最適な学び』『協働的な学び』の実現のために不可欠とされているのがＧＩＧＡスクール構想です。岩手では、令和８年２月、岩手県教育委員会が岩手大学・東京学芸大学と協定を結びＡＩやＩＣＴなどを活用することで専門的な知識を持つ教員の育成や児童生徒の学力向上を目指すことが発表されました。他方、他者への共感、寛容さ、より良い人間関係を築く力など、不易とされる人間性を育む教育のさらなる充実が一層重要性を増してきています。本支部の課題として、学校の統廃合による会員数の減少があります。会員加入の働きかけを工夫しながら組織の充実に努めて参ります。今年度もすべての子どもたちのために、幅広く教育関係者の会員を有する当支部の強みを生かし、関係機関との緊密な連携のもと、地域の特性を尊重し、教育水準の向上・健全育成に鋭意取り組んで参ります」との挨拶がありました。



支部長挨拶

次いで、ご来賓の岩手県教育委員会教育長代理松村達氏と岩手県市町村教育委員会連絡協議会会長代理佐々木健氏からご祝辞をいただきました。

続いて議事に入り、議長には、盛岡市立本宮小学校長の石亀健氏と盛岡市立北松園中学校長の立柳容子氏を選出し、事務局が提案した令和７年度事業報告・決算報告、令和８年度活動方針及び事業計画・予算案、規約の一部改正が審議され、全ての議案が承認されました。また、構成団体の人事異動等により、役員選考委員会で推薦を受けた支部役員案について審議され、監事に熊谷治久氏と熊谷幸一氏、ほかの新役員について承認されました。

講演
「子どもたちが『頑張る力』を持てる社会へ」

総会終了後、午後２時半から講演会が行われ、岩手医科大学医学部長 小児科学講座教授 赤坂真奈

令和８年度
日本教育会岩手県支部役員

支部長　川村　祥平
副支部長　髙橋ひさ子
　玉川　英喜
　新沼　敏哉
　内澤　英明
　熊谷　幸一
　金野　　治
　中村　智和
　成田　誠悟
　金澤　広利
　金濱　千明
　佐々木善成
　菅崎　　晋
　藤澤　周一
　佐々木　伸
　瀬川　貴光
　佐野　　理
　土川　　敦
　中村　雅英
　洞口　保雄
　平澤千麻子
　若林　晶子
　髙橋ひさ子

監事　熊谷　治久
理事　後藤　敏信
　米　　慎司
　菅原　修一
　吉川　健次
　久慈　　孝
　千葉　哲朗
　平賀　英和
　下川原宏明
　菅原　　一
　鎌田　政好

理事・組織事業部長
広報出版部長
調査研究部長
事務局長（支部）
事務局長（基金）
書記
東北ブロック代表理事
地区会長　事務局長
　（会　長）
盛　岡　田代　　航
岩　手　中田　直雅
紫　波　畠山秀一郎
　（事務局長）
　吉田　武雄
　西野　　悟
　平賀　英和

美氏から「子どもたちが『頑張る力』を持てる社会へ」と題してご講演をいただきました。「ご自身の生い立ちと医師になるまでの道のりや人生の転機となった恩師たちとの出会いと教育の大切さについて、自分では変えられないこと（出生地・家庭環境・障害・性別など）を嘆くよりそれを乗り越え『頑張る力』を身につけることの大事さ、二極化と地域格差が拡大している子どもたちの現状と課題や解決への取組」などについて、幅広く話していただきました。

（講演の概要は次号で紹介します）



質問に答える講師

令和7年度第16回教育実践顕彰事業
本県から応募の2校　ともに受賞

（公社）日本教育会の教育実践顕彰事業に、昨年度は紫波町立紫波東学園（紫波東小学校・紫波第二中学校）校長の内川千亜希氏と盛岡市立河北小学校長の君塚裕子氏が応募し、全国の数ある応募の中で、両者共に「奨励賞」に輝きました。受賞に際し、両氏並びに、両氏のもとに日々研鑽に励み、優れた実践を積み重ねた教職員の皆様に心からお祝い申し上げます。

内川氏の論文は本報に掲載されておりますので、ここでは「児童の『自主自立』を推進する学校経営～学校・家庭・地域が協働で取り組む人づくり～」をテーマとした君塚氏の論文の一端を紹介します。ちなみに同校は30数年前から道徳教育の研究を学校経営の基盤に据え、継続的に研究を進めていることでもよく知られています。

実践では、各種評価や調査、日々の指導で捉えた児童実態から課題を洗い出し、目指す児童像を細かに捉え直し、テーマ設定や方向性に繋げています。また、新年度会議や学校運営協議会、保護者への学校経営説明会等でも説明・協議を重ね、「様々な違いを持つ多様な児童個々が、思いや願い、課題意識を持って試行錯誤しながら取り組む過程を大切にすること」を三者（学校・家庭・地域）が共有し、大人の指導観や教師の授業観の転換も進めています。「自主自立」育成プランの具体化では、全てをリニューアル・精査して学校経営グランドデザインを作成、具体化しています。それが、児童が主体的に活動する諸活動、探究的な学習への授業転換、児童自身で健康を捉え継続的に生活改善に取り組むための支援等につながり、道徳教育とリンクした教育活動全体を三者共通理解の基に展開したことで、児童の伸長は勿論、大人の意見交流の活発化、個別支援や探究活動の支援のための学習ボランティアの立ち上げ等、三者の活性化にもつながっています。コミュニティスクールを活用した好事例と言えます。

なお、教育実践顕彰事業に対して、当支部からは平成22年度以降毎年複数校の応募があり、令和7年度までの応募数が延べ66校（園）を数えるまでになりました。これは、本県の教育への熱心で誠実な対応、活力ある学校経営や日常の意欲的な教育実践を現すものであり、大変誇らしいことでもあります。今年度も、皆様からの積極的な応募をお待ちしております。

令和8年度
一般財団法人岩手県教育振興基金役員

理事長　花巻　佐藤　貞志
副理事長　遠野　中浜　艶子
常務理事　北上・和賀　下川原宏明
理事　胆沢　佐藤　健司
江刺　菊池　慧
一関西　千葉　憲一
一関東　菅原　一
気仙　佐藤　健
釜石　河東　眞澄
宮古　青笹　光一
下北　鎌田　政好
九戸　大芦　賢一
二戸　筒井　裕一

監事　佐々木　晋
山本千和子
藤澤　周一
佐々木伸也
大竹　博行
佐々木　伸
布田　貢
似内　織江
滝澤真貴子
柏崎　裕之
瀬川　貴光

評議員　田村　忠
立柳　容子
成田　誠悟
菅原　壽
後藤　敏信
芳賀　郁夫
早川　貴之
吉川　健次
八重樫英広
金濱　千明
川村　祥平
中村　智和
新沼　敏哉
佐々木寿洋
千田　峰子
佐々木　淳
佐々木善成
藤田　知彦
山田　知弘
坂本　裕克
久慈　孝

いわての教育実践研究～その20～



主体的に学ぶ児童生徒の育成

～子供を主語とした授業づくりを通して～

前紫波東学園（紫波町立紫波東小学校・紫波町立紫波第二中学校）校長
現県南教育事務所　所長　**内川千亜希**

（公社）日本教育会主催の「令和７年度第16回教育実践顕彰事業」に応募した紫波町立紫波東学園（紫波町立紫波東小学校・紫波町立紫波第二中学校）が「奨励賞」を受賞しました。紫波東学園の取組について紹介します。

１　研究主題と主題設定の理由

現在、学校には、ＧＩＧＡスクール構想によって整備された一人一台端末や高速大容量のネットワーク環境の日常的な活用の促進と、それに伴う授業や学校の在り方に関する見直しが求められている。一人一台端末の導入により、情報や知識の習得は、学習や問題解決の主体である子供が、自らの判断に基づき、必要になったタイミングで個別最適に行うことができるようになった。子供が自立した学び手となっていくために、情報端末は欠かせないツールとなってきている。

このような背景において、本学園では研究主題を「主体的に学ぶ児童生徒の育成～子供を主語とした授業づくりを通して～」とし、小中一貫校での学びを土台としながら、「授業観の転換と授業の改善」、「情報活用能力の育成」、「ＩＣＴ機器の効果的な活用」の３つの手立てを通し、子供が主体となる授業の実現を目指して、５つの授業づくりの視点からの授業改善に取り組んできた。

２　「５つの授業づくりの視点」からの授業改善

「５つの授業づくりの視点」とは、個別最適な学びや協働的な学び、情報活用能力の育成等に基づく視点であり、授業内容や目標、児童生徒の学習状況に応じて５つの視点の中から重点を決め、授業づくりを進めている。「５つの授業づくりの視点」を児童生徒の発達段階に応じた言葉に置き換え「学びの視点５」として児童生徒と教師で目指す姿を共有しながら学習を進めている。

【視点１】対話や学習経験を基に、主体的に学習課題を見出す

児童生徒が、自らの気付きや考え、友達や教師との対話、学習経験などから問いを立て、学びを自分事として捉えながら必然性のある学習課題を設定することで、主体的な学びにつながっていく。児童生徒が、課題解決に向けて自走するための重要なスタートである。

【視点２】自己調整しながら、主体的に課題解決に取り組む

児童生徒が、自身の学習進度に合わせて計画を見直したり、必要に応じて学習方法を変えたり、自分の考えや学習を評価・改善したりするなど、自ら学習を調整しながら学ぶ個別最適な学びの視点。教師の作成資料、蓄積した自分の考えの振り返り、友達の考えなどを他者参照するなど、児童生徒一人一人が自分の学習状況に合わせて、情報を選択しながら学習を進めることができる環境を整えておくことが必要である。



【視点３】友達との学びから、自分の考えを広げ、深める

新たな気付きを得る、妥当性や信頼性を吟味する、自分の考えに生かすなど、よりよい学びを生み

出し、考えを広げ、深めていく協働的な学びの視点。協働的な学びは、個別最適な学びと往還させていくことで充実していく。友達に聞いてもらえてよかった、友達の話を聞くって楽しいな、という対話体験を積み重ねていくことが大切である。



【視点４】情報活用能力を発揮し、教科等の学びを深める

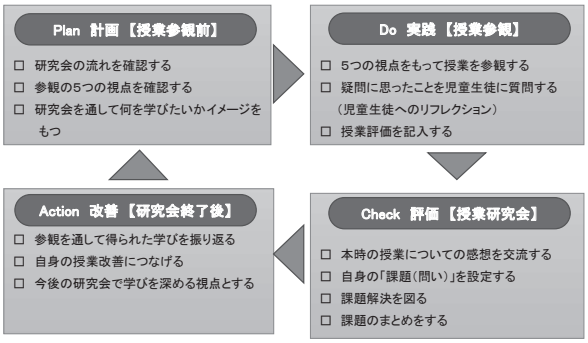
思考ツールは、「まとめる」「比較・分類する」「表現する」など、目的に応じて選択する。教師から提示するだけでなく、児童生徒が学びに必要なツールとして、自分で判断し、選択できるようにすることも大切である。タイピング等の技能も含め、授業と家庭学習を連動させることでさらなる育成につなげていきたい。

【視点５】課題解決の過程や学習の成果を自覚する

クラウド上に蓄積したものから「自分の成長や課題を振り返る」「学びのよさや方法を振り返る」「友達からの学びを振り返る」「自分の経験や既習事項と結び付けて振り返る」など、児童生徒は、自身の学びを自覚し、次の学習につなげていく。教師は、振り返りの内容が、次時以降の【視点１】や【視点２】にもつながってくることを意識しながら適時・適切なフィードバックをし、授業づくりをしていくことがポイントとなる。

参観の５つの視点
①　子供は、友達や先生との対話、学習経験を基に、主体的に学習課題を見出すことができているか。
②　子供は、自己調整をしながら、主体的に課題解決に取り組むことができているか。
③　子供は、友達との学びから自分の考えを広げたり、深めたりすることができているか。
④　子供は、情報活用能力を発揮し、教科等の学びを深めることができているか。
⑤　子供は、課題解決の過程や学習の成果を自覚することができているか。

PBL（課題解決型）　研究会の流れ



３　課題解決型の校内研究会

本校では、子供たちが主体となる授業を目指しているため、授業を参観する視点を全て「子供」を主語にしている。この視点は、児童生徒の学びや育ちを評価するものであるとともに、その姿を通して教員自身の指導についても振り返るものである。

授業実践を通して、授業者だけが学ぶのではなく、参加する全ての教員が、深めたいと考えた自身の「課題（問い）」をもって研究会に参加し、研究会の協議を通して、「課題（問い）」についての考えを深め、今後の指導に役立てるといった流れを取っている。授業終わりには、学びの主役である子供たち自身が本時の学びをどう捉えているのかを質問するリフレクションを行っている。

４　今後の研究の方向性

〈視点１・５からの授業改善〉

①教師による適切なフィードバックを行い、学びの自覚を支援する。

②子供が主体的に学習計画の作成や活用に関わることで、課題解決の過程を自覚できるようにする。

③振り返りの内容の質を高め、次時以降の課題につなげられるようにする。

〈視点４からの授業改善〉

①情報活用能力の育成の成果を子供が共有する場面を設定し意欲付けを図る。

②情報活用能力を駆使して学びを深めるための、クラウド環境を充実させる。

③情報モラル・情報セキュリティについて、学校全体で取組の改善を図る。

〈視点２・３からの授業改善〉

①内化した知識を外化しながら、知識を構造化・概念化するための対話の充実を図る。

②個別・協働の学びを支え・つなげる教師のファシリテーションの在り方を吟味する。

③個別・協働の学びを支えるために、学習材の収集や開発の充実を図る。

地区会だより



盛岡地区会

令和８年度総会・研修会・親睦会の開催

７月７日（火）、サンセール盛岡において、令和８年度の総会・研修会・親睦会を開催しました。

総会では、県支部から新沼敏哉副支部長をお招きし、地区会員78名の参加のもと、今年度の活動計画や予算案等を協議し、ご承認いただきました。



講演会の様子



講師の青井俊樹氏

続いて115名が参加した研修会は、今年度も岩手県公立学校退職校長会盛岡地区会と共催で開催しました。例年本会では、今日的課題をテーマにしており、今年度は、岩手大学農学部名誉教授 青井俊樹氏（農学博士）から、「ツキノワグマの生態と地域ぐるみの被害防除―岩手県のある集落のチャレンジ―」と題して、ご講演をいただきました。青井先生からは、クマの被害を防ぐためには生ごみなどクマを誘引する物を徹底して除去し、里の味を覚えさせないようにすることが大切であることなど、クマの生態に基づいた対策を具体的に教えていただきました。また、「駆除することや行政頼みだけでは被害は防げず、地域ぐるみで行う取組が欠かせない」など、先生のお話は大変示唆に富んでいて、これから私たちにできることを深く考えるよい機会となりました。

研修会後の親睦会は、113名の参加のもと盛大に開催され、教育行政の皆様をはじめとして参加者全員で親交を深める大変有意義な時間となりました。

（事務局長　吉田　武雄）

岩手教育振興基金 寄附者御芳名

（敬称略）

○高等学校長協会

▼盛岡地区（１名）　鎌田和茂

▼岩手地区（３名）　横坂さくら・菊地健・菊池淳

▼花巻地区（１名）　中村和平

▼遠野地区（１名）　小野寺一浩

▼胆沢地区（１名）　植木淳

▼気仙地区（１名）　水上弓枝

▼釜石地区（２名）　高橋健・佐藤康伸

▼宮古地区（３名）　柴田護・谷地信治・本正千夏

▼九戸地区（３名）　菊池平・曽根達也・菅原裕子

▼二戸地区（１名）　竿代愛也

（17名）

○高等学校副校長協議会

▼盛岡地区（８名）　鳩岡史朗・村上浩紀・及川智春・畠山美穂・中元俊司・金野守・金野憲・小野寺昌樹

▼岩手地区（１名）　大沢勝

▼花巻地区（１名）　中島雄

▼胆沢地区（１名）　千葉智恵

▼一関東地区（１名）　近藤衣里

▼気仙地区（２名）　千葉信彦・大内恵子

▼宮古地区（２名）　畠山隆行・濱山勝

▼九戸地区（２名）　金野美香・西舘智香子

▼二戸地区（２名）　照井祐輝・菊池敏

（20名）

今回は、（公財）岩手県育英奨学会への助成金１万円のご寄附をいただきました岩手県高等学校長協会の令和８年度新任校長様、同じく１万円のご寄附と岩手県教育振興基金へ５千円のご寄附をいただきました岩手県高等学校副校長協議会の令和８年度新任副校長様の正会員をご紹介させていただきました。

温かいお志をお寄せいただき、多額のご支援・ご協力を賜りましたことに心から感謝申し上げます。

公益社団法人日本教育会
令和８年度第52回総会及び研修会報告

公益社団法人日本教育会の令和８年度第52回総会は６月27日（土）東京都渋谷区「国立オリンピック記念青少年総合センター」で開催されました。

台風の影響で急遽オンラインに切り替え、支部からは川村祥平支部長と髙橋ひさ子副支部長が、代議員として中村智和氏（岩手県高等学校長協会会長・岩手県立盛岡第一高等学校長）が出席しました。

初めに鷲山恭彦会長の挨拶があり、続く議事では①令和７年度会務及び事業報告の件②令年７年度貸借対照表等の件③令和８年度役員（理事・監事）一部補充承認の件④令和８年度第52回総会宣言（案）の件が審議され、全ての議案が満場一致で承認されました。

また、令和７年度第４回理事会で承認された令和８年度の正味財産増減予算についての報告がありました。

総会終了後、理事長や支部長として長年日本教育会にご尽力された方々に感謝状が贈呈され、受賞者を代表して、前理事長笹尾幸夫氏が謝辞を述べられました。

引き続き、「第16回教育実践顕彰受賞式」が行われ、最高賞である「会長賞」（賞状と奨励金10万円）の栄誉に輝いた東京都大田区立東蒲小学校と大分県中津市立津民小学校に鷲山会長から賞状と奨励金が授与されました。

受賞論文は(公)日本教育会ホームページに紹介されております。



第16回教育実践顕彰受賞式
鷲山会長より授与

理事及び代議員を対象に行われた研修会では、昨年度に引き続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課長　武藤久慶氏を講師に、「生成ＡＩ時代の学習指導要領改訂」について研修を深めました。武藤氏は重視したいこととして次の６点を中心に話されました。①多様性を包摂したい、②自分なりの賢い学び方をさせたい、③学ぶ意味を意識してほしい、④民主主義の担い手を育てたい、⑤自分の考えをもってほしい、⑥支える側の働き方改革と両立させたい。

キーワードは「多様性」。急激に進む社会の多様化の中で、多様な個性や特性、背景をもつ子どもたち一人ひとりの学びを保障し、「深い学び」ができる仕組みや環境を整えること。その例として「多層型支援×ＩＣＴ」、「まんがで知る学習方略」を含めた子ども用図書の紹介、そして子どもたちの学びを育む学校の働き方改革などについて話されました。

月刊「日本教育」６月号の特集「学習指導要領改訂最新動向PartⅠ」の冒頭に、武藤課長の「次期学習指導要領の方向性を『明日の学校改善』につなげる」と題する提言が掲載されておりますのでご参照ください。

スポット その190

岩手県中学校長会　会長
理事　**米　慎司　氏**
（盛岡市立河南中学校　校長）



米慎司校長先生は、令和７年４月に第25代校長として着任されました。校訓「自立・協力・向上」を心に刻みながら、「ハピネス河南の創造」を基本理念に掲げ、生徒一人ひとりが「わかった！できた！認められた！」という喜びを実感できる学校づくりに情熱を注いでいらっしゃいます。

主体的・対話的な学びの充実や、生徒の自己肯定感を高める教育活動を大切にしながら、安全・安心な環境づくりにも力を注いでおられます。今年度は岩手県中学校長会会長として県内の子どもたちのためにもご尽力されながら、笑顔あふれるハピネススクールの実現へ向けて、日々邁進されています。

（副校長　三河　不二夫）

シリーズ 学校キラリ㉗

「自然・文化・仲間とともに育つ小川小学校」

岩泉町立小川小学校　校長　滝澤　真貴子

豊かな自然に抱かれた岩泉町。その西方に位置する本校周辺は、かつて石炭や耐火粘土の採掘で栄え、多くの人々の暮らしが息づいてきた地域です。令和２年４月には旧小川小学校と旧門小学校が統合し、新たに「小川小学校」として歩みを始めました。本稿では、地域学習と児童会の取り組みを紹介します。

１　「清流の日」と地域学習を通した郷土理解と愛着

小川小学校の学区は、平成28年８月の台風10号により甚大な被害を受けました。今年はその豪雨災害から10年の節目にあたります。本校ではこの経験を踏まえ、防災や復興について学ぶ教育を継続してきました。毎月実施している「清流の日」では、過去の災害を振り返り、防災意識を高めるとともに、自分自身や地域の未来について考える時間としています。また、日々目にする澄んだ水の豊かさに加え、救沢念仏剣舞や畑わさび、ホルモン鍋などの地域文化の学習、さらにＰＴＡ主催の郷土料理づくりなど、子どもたちは多様な地域の魅力に触れる活動に取り組んでいます。こうした学びを通して、生まれ育った地域の魅力を実感し、郷土への愛着を一層深めています。



令和７年度学習発表会　３・４年生
『小川のいいとこ　伝え隊！！』

２　児童会スローガン「全校で挑戦～小川っ子へ」に込めた思い

今年度の児童会スローガンは『全校で挑戦～元気・やる気・小川っ子へ』です。本校の子どもたちは素直で明るく、学びの中で「もっと前進したい」「さらに成長したい」という思いを自ら見いだしています。その思いを言葉として表したものが『小川っ子へ』というスローガンです。６月上旬に児童会が企画・運営した全校遊びでは、高学年がリーダーとなり、下級生に声をかけながら活動を進める姿が見られ、全校で挑戦するという目標に向かう頼もしさと成長が感じられました。

校歌には、「清流の音　鳥の声」「満天の星　薫る風」など、この地域の豊かな自然を象徴する言葉が並び、「共に学んで明日をひらく」「友だちの花　ここに咲く」といった子どもたちの成長を願う思いも込められています。校歌の願いのように、子どもたちが共に学び、友だちと花を咲かせられるよう、教職員一同、地域と力を合わせて教育活動を推進してまいります。

山寺の鐘

本校では、学校教育目標「自立貢献」の実現に向け、「活力と感動に満ちた学校」を目指しています▼多くの保護者や地域の方々をお迎えした体育祭では、生徒会執行部や委員会が率先して準備に取り組みました。本番でも全員が一致団結し、工夫を凝らした応援や競技を創り上げました。生徒からは「リーダーの頑張りと全員の協力が成功を導きました」「この団結を今後の日常生活にも生かしたいです」といった力強い言葉が聞かれました▼また、翌週には特設合唱部が、岩手県政１５０周年記念式典に参加しました。多くの関係者とともに「岩手県民の歌」を響かせ、生徒は「歌う楽しさや一体感、感動を再確認できました」「この学びを今後の活動につなげたいです」と感想を語っていました▼行事を通じて主体性を高めた生徒の姿は、頼もしい限りです。今後も学校、家庭、地域が一体となり、「魅力ある学校づくり」に全力で取り組んでまいります。

（盛岡市立黒石野中学校　校長　千田　幸喜）